

2 中高連携授業変革の歩み

(1) 可児市立蘇南中学校における実践

< 授業実践 >

授業実践に向けての構え

⑦ 13年度の成果

- ・ 授業交流や研究会、実践交流を通して、生徒の学習の様子やお互いの学校が抱える課題などを共通に理解することができた。授業におけるねらいや教材の取扱い、指導方法などに相違があったが、「教科の基礎・基本をどう培うか」という共通な部分についても明らかにすることができた。
- ・ 聞き手を意識した話し方ができるなど、中学生、高校生ともに音声を中心としたコミュニケーション活動に意欲的に取り組む生徒が増えてきた。

⑧ 14年度の方向

- ・ 教科書の改訂とあわせ、ねらいや付けたい力を明確にした指導計画を作成し、指導にあたる。その際、単元や単位時間ごとの評価規準も位置付ける。生徒にとって必然性のあるコミュニケーション活動を音声重視して設定するとともに、段階的にコミュニケーション能力が高まるように指導にあたる。

第1回授業交流研究会

【日 時】 平成14年7月8日(月)

【公開授業】

- ・ 単元名 New Horizon English Course 3 Unit 2 “Don't Throw It Away”
- ・ 授業学校・学級 可児市立蘇南中学校 3年5組
- ・ 主な提案内容

願い・工夫点

- ・ コミュニケーションに対する意欲は高く、聞き手に伝わるように視線や声の大きさなどを意識して活動することができる。さらに、やや長い文を暗記するのではなく、相手に内容を効果的に伝えるために気持ちが表れた話し方ができるような表現力を付けさせたいと考えた。

授業内容(生徒の主な言語活動)

- ・ Oral Introduction と T-P 間での Q&A による内容理解
- ・ 場面の様子や気持ちの読み取りと交流
- ・ 気持ちが伝わりやすくするための文の強勢や話す速さの工夫
- ・ 教科書の場面の雰囲気や登場人物の気持ちが伝わるような、ペアでの対話文づくりと発表

生徒の姿

- ・ 多くの生徒が教師との Q&A に素早く反応できていた。
- ・ ペアで粘り強く対話文づくりに取り組んでいた。
- ・ 仲間の英語表現に対して、聞き手がしっかりと反応していた。

【授業研究会】(授業でみられたよさと課題及び改善の方向)

- ・ 英文や語句に着目して、登場人物の気持ちを丁寧に読み取っていく活動は、高等学校においては指導計画に位置付けることが難しく、今後も中学校において大切にしたい。
- ・ 単元で扱う言語材料(現在完了形)を定着させるために、対話活動の中で生徒が慣れ親しむことができるよう、意図的にタスクや対話の内容を工夫する必要がある。
- ・ 気持ちが伝わるような対話のモデルを、表現と音声の両面から生徒に示していく必要が

ある。また、こうした表現と音声の定着を本時（一単位時間）だけで図ることはむずかしく、さらに単元を通して段階的、継続的に指導していくことが大切である。

- ・定着させたい表現や音声にかかわる指導内容については、教科書英文の introduction（内容理解）だけでなく、できるだけ多く触れることができるよう意図的に指導していく。
- ・ねらいは「教師の努力目標」ではなく、生徒にも分かる到達目標としたい。対話文づくりについても教師・生徒ともに目指す姿にまで到達させるには、授業の効率化、重点化を図り、一人一人の生徒が時間をかけて取り組めるようにしたい。

第2回授業交流研究会

【日時】 平成14年11月5日（火）

【公開授業】

- ・単元名 New Horizon English Course 1 Unit 6 “南半球からのメール”
- ・授業学校・学級 可児市立蘇南中学校 1年2組
- ・主な提案内容

願い・工夫点

- ・意欲的にコミュニケーション活動に取り組めるようになってきたことを生かし、さらにペアや班などの少人数での交流にとどまらず、まとまりのある文章を学級全体の場で発表できるようにしたいと考えた。

授業内容

- ・教師による他者紹介のデモンストレーション
- ・伝わるための5つのポイント（Big Voice・Eye Contact・Smile・Speed・Gesture）を意識した個人練習
- ・班代表による発表と仲間同士や教師による評価

生徒の姿

- ・多くの生徒が伝えるためのポイントを意識して練習に取り組めた。
- ・仲間の発表を真剣に聞き、アドバイスし合うことができていた。
- ・ペアで練習し、助言し合うような、好感のもてる姿が多く見られた。

【授業研究会】（授業でみられたよさや課題及び今後の方向）

- ・課題提示場面での教師のデモンストレーションは、本時の付けたい力としての評価規準そのものであり、生徒にとっても目指す姿をイメージすることができ意欲化を図ることができた。また、教師がデモンストレーションで用いた絵については、あえて不完全なものにして、「誰のことだろう？」という疑問や分からないという緊張感をもたせながら行うことで、必然のあるコミュニケーションを実感させることができる。
- ・中学校1年生の生徒にとって英語学習は大きな意味をもつが、授業者の英語発音のよさや発話のはたつたさは、音声面で大きな効果を生徒たちにもたらしている。一方、“I have ~. He has ~.”などの人称にかかわる言語材料について、音声面からの指導に加えて、適切な場面で文字で示し、理解度を確認しながら指導にあたることも必要である。
- ・meaningful な活動に多く取り組ませ、コミュニケーション能力を付ける授業をすることが大切である。その際、次の3点に留意して活動内容を工夫する必要がある。個々の創造性が発揮できること、思わず反応したくなるような活動であること、溢れんばかりの英語に触れさせること、の3点である。

<グローバル・スタンダードによる英語力診断>（ケンブリッジ英検）H14年7月実施

- ・受検者数スターターズ(57名)・ムーバーズ(65名)・フライヤーズ(29名) 合計 151名
- ・今回の検定試験を契機として、自分の英語力に関心を持ち、他の英語検定試験へ挑戦しているという生徒が増えてきた。また、面接官が生徒に対して大変親切に問いかけていただけ

- たことにより、生徒も「初対面の大人と対話する」という貴重な体験をすることができた。
- ・合否ではなく「盾の数」などで個人向けに細かな分析結果が与えられ、生徒は技能ごとの英語力を客観的に知ることができ、以後の英語学習の課題を明らかにすることができた。

<イマージョン・プログラム>

ネイティブ・スピーカーによる異文化理解

- ・民間派遣会社から外国人講師を2名（アメリカ人・カナダ人）招いた。昨年度の学年集会という形から、一人一人の生徒が英語により多く触れることができるように、本年度は学級単位で指導にあたっていただいた。
- ・日本人にも身近な話題であるクリスマスについて、文化的背景や生活の中に根ざす宗教への信仰にかかわって関連する表現や語彙とともに分かりやすい例を提示しながらすべて英語による説明がなされた。また、生徒の理解度の確認がクイズやゲーム等によりインタラクティブに行なわれ、生徒は講師の英語に対して自然に反応できた。



授業後の生徒の感想より

グレアム先生に自分から積極的に話しかけることができたのでよかった。Christmas という語の前半のChrist がキリストのことを意味し、しかも「クライスト」という発音になるというのも初めて知りました。それに日本でよくXmas とキリストをX で書くというのは本当はよくないし、カナダではあまり書かないという話も意外でした。たくさん先生の話も英語で聞き取ることができ、今日は楽しかったです。クリスマスが「日本のように、ただ贈り物をもらって...」という感じではないことが分かりました。

英字新聞の購読やポスターの掲示

- ・英字新聞（Student Times：週刊）を図書館に設置することで、興味のある話題について英語でも読んでみようとする生徒が増えてきた。「これ、ワールドカップの記事やね。少しわかるようになったよ。」など、興味のある記事について積極的に内容を理解しようとする生徒の姿が見られるようになった。
- ・色や形などを特集したカラーポスターを掲示することで、教科書題材の内容理解を深める付加的な教材として生徒が関心をもって見る事ができた。



<成果と課題>

- ・ケンブリッジ英検の面接官やネイティブ・スピーカーによるまとまりのある英語にふれることで、生徒は日々の授業のコミュニケーション活動の大切さを実感した。また、英字新聞やポスター、ビデオ教材等の英語に触れることで、教科書教材にかかわってより時事的・発展的な表現や内容を自ら求めようとする生徒の姿が見られるようになった。
- ・音声を大切にし、言語活動をコミュニケーションなものとなるよう工夫したことにより、日本人教師やALTの英語による説明や指示に対して、内容を大切にして自然に反応する姿が見られようになった。
- ・高等学校の先生方から「慣れ親しむことに加え、きちんと指導内容の定着の見届けること」についての指摘があり、評価規準に加え「生徒が運用する英語」を指導計画に位置付けた。このことにより、教師が、生徒に付けたい力を重点的・段階的に指導することを意識した取り組みをすることにつながった。今後、生徒の具体的な英語運用の姿を明確にした上で、コミュニケーションの必然のある言語活動をするとともに、基礎的・基本的な内容の定着を見届ける評価の在り方を工夫したい。